

CS（モデル校）を立ち上げ一年。 CS通信15号（モデル校）



コロナ禍での立ち上げでしたが、それぞれのモデル校が、それぞれ独自の活動をCSディレクター、運営協議会の方々と進めています。どの学校も、子どもたちも、関わる地域の方も、そして先生方も楽しみながら、やりたい（意志をもって）活動しています。（この楽しみながら、意思をもってということ大切にしたいなあ。これから立ち上げる学校も、この姿勢を大切にしてほしいなあ。）モデル校を見ると、地域の方々からの指導、支援というものだけでなく、先生や子どもたちから発信する活動も見えてきました。まだ、一年ではありますが、学校と地域の距離が少しは近くなった気がします。お互いが学校という場を通して学び合う関係が今後も少しずつ、増えていきたい。きっとそれが、子どもたちは地域を誇りに思い、地域の方々は、学校を誇りに思うことに繋がっていくのではないのでしょうか。「みんなの学校」といえる学校になることを願って…。



萩間小

萩間小の運営協議会では、地域の方に「子どもたちとともに書き初め会に参加しませんか」と呼びかけました。今まで、地域の方が学校に入るときには、子どもたちの指導や支援、ボランティアという形でお願いして、来ていただくというのを見てきました。この書き初めに関しては、参加する地域の方が、自分も書き初めをする、書き初めの授業を受けるという学びの姿勢で参加し、その上で、子どもたちへの支援もしています。

さらに、先日の学校運営協議会の議事録には、今後の計画の中に「樹木の剪定講座」というものがありました。これが実現すれば、参加した地域の方は剪定の仕方を学べるし、学校は、木々の剪定をしてもらえると、両者にとって実になる活動になります。また、萩間公民館の講座の一つを、学校で開催できないかも検討しているようです。萩間小のCS活動は、地域の方も学ぶことができ、さらに子どもにも、学校にもかかわれるという活動が見えはじめました。小西先生（兵庫教育大）の「地域の大人の学ぶ姿に触れることで、子どもたちが計り知れない地域愛を自ら育むことはできるはずだ。」が頭をよぎりました。子どもたちにとっても、地域の方々にとっても活性化する取組だと感じます。みんなが楽しみながらお互いにとってプラスとなる活動。こういう活動ならば持続可能というか長続きしそうです。子どもたちはもちろん、地域の方も元気になります。

勝間田小

勝間田小学校で発行しているCS通信29号でも、子どもも地域も元気になる記事を見つけました。それは、3年生の子どもたちが、学校のふるさと学習で「お茶の入れ方」を地域の方から学習し、その学んだことを実践する場を考えたという記事です。具体的には、地域の勝間田会館で行われた、お年寄りのふれあいサロンに3年生が参加し、お茶でのおもてなしとダンスの披露や楽しいゲームなどを行った、ということです。地域の方に学校に来ていただくのではなく、地域の方々が発見されている場に出かけて自分たちの学習したことを発表しています。学校に来て下さいというスタンスではなく、出かけていくという形は新たな形ではないでしょうか。生徒の学びを実践する場が、ふれあいサロンに参加している地域の方々を元気にする活動になる取組は、とても新鮮に感じました。そう言えば、勝間田会館には、CS通信を掲示するスペースを確保できたようで、今まで以上に学校の様子が地域に伝えられるようになったようです。



相良中

相良中学校も、以前紹介した図書館の本のクリーニングは、クリーニングをおこなっていた地域のボランティアの方々や図書館関係者に元気をもたらしました。数名の生徒の参加ではなく、全校の約半数が、ボランティアの呼びかけに responding していました。子どもたちが自分の時間をボランティアに使おうという主体的な姿勢に圧倒されます。そして、ボランティアに取り組んでいるときの子どもたちの誠実な取組に心が洗われました。



そう言えば、相良中学校は、生徒会の提案で、榛原病院へコロナ感染症に関わる医療従事者の方々へ、励ましのメッセージを全校で送って来ていました。（この図書ボランティア当日、生徒会担当教師が榛原病院にメッセージを持って行ったようです。）このような取組は、市内の他の学校でも行って来ていますが、主体的な子どもたちの気づき、実践と意識の高さを感じます。

